

みんなのページ

書評 「蠅の帝国」及び「蚩の航跡」(軍医たちの黙示録) はぎほうせい 帚木蓬生 著

今年 2025 年は第二次世界大戦の終戦から 80 年に当たる節目の年になる。対戦の犠牲者は 4 千万人とも 5 千万人ともいう。日本では民間人を含めて 310 万人もの命が奪われた。明治維新から約 80 年。近代国家を目指して歩んだ日本の、まことに惨めな敗戦であった。私は何故このような結果に至ったのか、歴史書や解説書的な本を読み、それなりに理解したつもりではいたが、ここに紹介する 2 冊の本は、戦後生まれでかつ医師である若者が、実際に戦闘に参加し生還した軍医達に丁寧かつ綿密に取材し、それを元にドキュメント風に著したもので、その臨場感は類をみない。

例えば、東部ニューギニア戦線での転進(退却)の場面では、敵機の爆撃の中、一ヶ月分の米一升の食料を持ち、ジャングルの中を逃げる。また熱帯性マラリアの患者を担架で運んでいる兵もフラフラだ。それで

も軍医は乏しい医薬品で苦心の治療をするが、「軍医長、お世話になりました」と言って亡くなる。敵の襲撃の中を味方の艦船が救出に来ると、そこまでに行くための大発(上陸用舟艇)に我先にと乗り込む将兵。大勢乗ると沈没のおそれがあるので、後の者を蹴落としてまで乗ろうとする。生き残りをかけた、友情など全くない光景が展開する(芥川龍之介の『蜘蛛の糸』と重なる)。この様な、今までの戦史物にはない生々しい状況があちこちに描かれ、当時の戦闘の多くがいかにも無謀であったことがわかる。それでも戦死者は名誉の戦死として扱われている。

現在、再び大きな戦争があるかもしれない状況だ。あらためて戦争、戦闘の空しさを思い起こさせる 2 冊の本、是非お勧めしたい。

なお、この 2 冊は共に日本医療小説大賞を受けている。

前田紘志(茨城県在住)

「今こそ、まっとうな日本の気候政策を創ろう」キャンペーン

「今こそ、まっとうな日本の気候政策を創ろう」実行委員会では、Web ページ内に、皆様の根本的かつ率直な質問に答える「Q & A コーナー」を設けました。こちらで掲載内容の一部をご紹介します。

Q 1 : 環境の専門家たちは、「気候変動は重大な危機」と叫んでいますが、本当に「重大な危機」なのですか。本当に重大と言われる根拠を教えてください。

A 1 : 重大な危機です。20 世紀後半から人類未経験の急激な地球温度上昇が観測され、それに伴う気象災害が日本国内だけでなく世界中で多発し、健康被害も発生しています。CO₂ などの温室効果ガスの排出を続ける限り温度は不可逆的に上昇し、人力では止められなくなる可能性も予測され、そうなれば生態系も人類も持続不可能です。(回答者：西岡秀三)

Web ページには詳細な説明も掲載しておりますので、是非ご覧ください。
(HP の閲覧ができない方は事務局までご連絡ください。)

